

言葉の処方箋

いい覚悟で生きる 樋野 興夫 P14

人生いばらの道、されど宴会

心の宴会をたくさん持てば、苦しみを忘れられないまでも、ちょっと離れていることができます。

いばらの道と宴会、お互いに交わることのない言葉のように思えるでしょう。いつたいなんのことだと思う方もいるでしょう。

「言葉の処方箋」はぜひ声に出して読んでみてください。すると、意味そのものよりも、言葉のリズムや語感が頭に残り、ちょっと楽しくなりませんか？ \*

ある日のがん哲学外来でのことです。前立腺がんで4年来、治療を受けているこの患者さんは、血色もいいし、はつらつとしていてがんには見えません。

「だから、みんなが言うんです。『元気そうで、とてもがんで闘病しているとは思えない!』って。中には、『髪もふさふさじゃないか』と言うひともあります。がん患者は元気そうではいけないのか、と正直、落ち込みます」 \*

声をかける側は、思っていたよりも変わらぬ姿に安堵して、相手を気遣い、励ましの気持ちを込めて言っているのだと思います。「元気そうでよかった」という言葉に相手が傷ついているとはなかなか思えないでしょう。\*

でも、その患者さんは言われるたびに、「じゃあ、青白い顔をして、やせ細って、力のない声、今にも倒れそうな姿でいかにもがん患者という姿でいれば、あなたは満足するのか」と感じてしまうのだそうです。思いのほか元気そう、がん患者には見えなという言葉こそ「いちばんいやな言葉」だと言いました。\*

この発言に驚いたのは、同席していた家族です。突然の発症からこれまで前向きに、一緒にがんと闘ってきたと思っていたのに、心の奥に畳んでいた複雑な思いがあった。患者さんが吐露したのは、周囲の人たちが、治療の苦しみや再発、死への不安を軽くしてあげようと口にする「わかったような言葉」の心なさだったのです。\*

そこで、私は言いました。

「人生いばらの道、にもかかわらず宴会。されど宴会でいきましょう」と。

みんな一瞬あつけに取られました。 \*

宴会というと、なんとなくお酒が入って大勢でにぎやかに過ごす会を連想するかもしれませんが。なんと不謹慎だと思う方もいるでしょう。もちろん、時には家族や親しい人と、お酒でも飲みながら歌ったり語り合ったりしたら、楽しいでしょう。でも、ここで私が言いたいのは、そうした物理的な宴会ではなく、ひとりでもできる「心の宴会」です。\*

がんで苦しんでいる人でも、一瞬たりともがんのことが頭を離れないというわけではないと私は思います。東の間でもがんを忘れることがあるのではないのでしょうか。

そんなときは、きつと親しい人の顔や好きな音楽、書物などの一説を思い浮かべたり、趣味のことを考えたりしているではありませんか。あるいは、これまでに受けてきた親切や思わずほほえんでしまうような出来事を思い出しているかもしれません。\*

こうした心に残る出来事や言葉、感激した思いを反芻して、しばし鼻歌交じりの気分ひたるひととき、これが心の宴会なのです。

こうした心の宴会をたくさん持てば持つほど、苦しみや傷ついた気持ちを忘れる時間は増えていきます。忘れられないまでも、ちょっと離れていることができます。だから、こうした宴会をできるだけたくさん持つてください。夜毎の宴会、朝からの宴会、大いに結構ではありませんか。\*

そう説明すると、患者さんは破顔一笑。「がんになっても人生は続いているんですよ。いばらの人生であればこそ、病気のことば置いておいて、楽しまなければ損です」と言ってくれました。\*

人の一生はどこかでいばらの道に踏み込むこともあり、決して何事もなく無事に、というわけにはいきません。誰もが、人生に一喜一憂することがあるでしょう。それでも、どんな境遇にあつても、人生は楽しまなければならない。私自身もそうありたいと願い、言葉を贈っています。\*

困難に見舞われるときこそ、しばし「心の宴会」に身をゆだねて、ほほえみを取り戻してほしいと思います。そのひとときは、あなたが思う以上にいばらの道を踏みしめて歩く力になるのですから。

主催 岡倉天心記念 がん哲学外来・巣鴨カフェ「桜」

後援 一般社団法人がん哲学外来

